

自己評価表(最終評価)

鳥取県立倉吉総合産業高等学校

中長期 目標	1 誠実な心を育て、たくましく生きる力を養い、個性豊かな人間形成を図る。 2 実践的な学習をとおして、創造する喜びを体験するとともに自主・自律の態度を養う。 3 様々な教育活動をおとして、他人を思いやり、友情を育み、さらに心身ともに健全な態度を養う。 4 望ましい勤労観・職業観を育て、地域産業を支える人材を育成するとともに地域の発展に貢献する。
-----------	--

今年度の 重点目標	1 心身ともに健やかな生徒の育成 2 生徒の夢や希望が叶えられる学校づくり 3 地域に愛され、信頼される学校づくり 4 専門教育の推進
--------------	--

年 度 当 初					評価結果(最終評価)		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標 (年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
1 心身ともに 健やかな生徒の 育成	基本的生活習慣 の確立とマナー の徹底 【生活部】	・「挨拶」「時間」「身だしなみ」の3点を中心とし、 基本的生活習慣の確立を目指している。 ・礼法指導、遅刻指導、整理整頓指導、清掃指導 などを通じて、生活習慣を整える習慣を身につけ させたい。 ・「時間」を守ることについては、学科・学年と連 携して指導している。(「防げる遅刻」の年間実績 は43回で昨年度より10回減っており、総遅刻回数 においても昨年度比－18回と減少した。) (令和5年度のいじめ認知件数 0件)	・年間で「防げる遅刻」を24回以下と する。(昨年度は目標を24回以下と設 定し、43回) ・校外外で明るく気持ちのよい、心の こもった挨拶ができる。 ・学校アンケート(保護者)の『規律・ マナー』項目の「1・2」評価の平均を 90%以上とする。(昨年81%、一昨年85%) ・学校アンケート(生徒)の『挨拶』項 目の「1・2」評価の平均を90%以上とす る。(昨年91%、一昨年91%) ・学校アンケート(生徒)の『学校のき まり』項目の「1・2」評価の平均を90% 以上とする。(昨年92%)	・年間の「防げる遅刻」の目標を生徒会執行部と の協議の上設定し、生徒主体で取り組めるように 働きかけをする ・教職員で率先して「あいさつ」することを共通 認識し、また、授業内での「あいさつ」指導も年 度当初の重点目標と位置づけ全教職員で取り組 む。 ・朝読書を8時35分にスムーズに始められるよう、 5分前の8時30分着席の指導を生徒会執行部、教職 員で実施していく。(生徒会執行部からの声かけ 運動、あいさつ運動と連携して教職員の教室での 声かけ運動を計画) ・生徒の進路実現、自己実現を見据えた中で、生 徒が主体的な行動者となるよう、授業、部活動、 学科、生徒会執行部と連携し、教職員の共通認識 を大切に指導していく。	・「防げる遅刻」については、1月末現在で、31回(内訳：1 年13回、2年10回、3年8回)となっており、前年度(39回)と 比べると減っている。 ・校内での気持ちのよい挨拶に関しては、まだまだ浸透して いない状況だが、生徒の挨拶に対する意識の自己評価は高 い。 ・学校アンケート(保護者)の『規律・マナー』項目の「1.2」 評価は68.4%であり、前年81%に比べると下がった。 ・学校アンケート(生徒)の『挨拶』項目の「1.2」評価は 89.7%であった。 ・学校アンケート(生徒)の『学校のきまり』項目の「1.2」 評価は92.3%であった。	C	・生徒会執行部とともに、今年度当 初から、時間厳守を柱に啓発活動を 行った。今後、挨拶に焦点を当てた 啓発活動を、生徒会執行部と連携を とって実施していく。 ・朝読書の時間が気持ちよく開始で きるよう、5分前着席指導を生徒会、 教職員で連携する。 ・教職員の共通認識を図り、様々な 指導の機会の中で、学年・科・クラ ブ活動における系統的な指導や声か けを実践していく。 ・4月から1学期中間考査までを重 点期間として今年度の課題について 学校全体で意識づけしていく。 ・規律・マナーについて、生徒と対 話の機会を設け、対応していく。
	部活動・生徒会活 動の奨励 【生徒部】	・今年の4月時点の部活動等加入率 (1年79% 2年81% 3年88%) 4/30現在 ・生徒会執行部の学年別構成 (1年0人 2年2人 3年11人) ・執行部会は生徒会行事前にのみ開催 ・学校生活アンケート結果(昨年の7月→12月) 学校行事に楽しく参加協力できた96%→96% 部活動に積極的に取り組んでいる83%→79% ・先生に言われて活動する場面が見られる	・加入率の引き上げ(執行部加入も含 めてカウントし、加入率95%以上を目 標とする) ・執行部への1,2年生の積極的参加 ・生徒会執行部会およびクラブ運営委 員会の定例化&活性化 ・生徒自身による主体的な体育祭・学 校祭等生徒会活動の企画運営	・部活動未加入者への部活動、執行部・学校祭実 行委員会への参加呼びかけをする。 ・LHR等の学年レクリエーションにおいて執行部 員を活用する。 ・会議を定例化し、Googleクラスルームの活用を 行う。 ・他校の学校祭の見学や執行部との交流の推進を する。	・12月時点での部活動加入率82%(1年80%2年83%)。執行 部26人。学校祭実行委員40人。 目標の95%には達しなかったが、未加入の生徒に声かけを し、入部した生徒があった。 ・必要に応じて、執行部会や実行委員会を開催した。 ・体育祭・学校祭準備等、生徒が主体的に企画・準備・運営 をし、多くの生徒が活動できた。	B	・部活動加入率95%に向けて、粘り 強く勧誘する。 ・各種生徒会行事の生徒の主体的な 取組をより推進していく。 ・執行部・実行委員への1・2年生の 積極的参加を呼びかける。
2 生徒の夢や 希望が叶えられ る学校づくり	進路指導の充実 【進路部】	・具体的な進路目標を定めているが、実現のため の方策や取り組みを計画できない生徒が多い。また、 基礎学力の定着や文章力、表現力が十分身に ついていない。 ・就職希望者支援体制についてはできているが、 進学指導に関しては、個別指導による部分が多い。 ・昨年度も求人とは多く、就職内定率が100%であっ た。	・計画的に進路行事を実施し、キャリ ア教育を充実させる。 ・学習指導委員会による進学支援体制 を確立させる。 ・年度内に就職内定率を100%とする。	・進路意識を持たせるため、進路講演会、進路学 習会、進路説明会、進路LHR等を実施し、職業観・ 勤労観の育成に努める。 ・1年次から進学者補習を計画して、大学・短大や 医療系専門学校を希望する生徒の学力向上に努 める。 ・進路部と教務部・学年団・各科との連携を密に するとともに、学力分析や指導方法について検討 していく。 ・12月から2年生の進路指導に取り組み、生徒が進 路実現に向けて行動できるよう計画的に個別に 指導を行う。 ・定着指導・求人依頼・企業開拓のため、県内の 企業を積極的に訪問し企業や産業界の情報を収 集し、共有する。 ・4月の面接週間に3年生就職希望者に対する進路 部との面談を行い、就職指導の充実をはかる。 ・進学希望者(大学、短大、医療系専門学校)対 する進路部との面談を行い、進学指導の充実をは かる。 ・1年生対象の進路講演会を早期に開催すること で、基礎学力の必要性を理解させ、学力向上を目 指すよう取り組ませる。 ・倉吉市役所・倉吉商工会議所主催の倉吉市企業 説明会に1年生を参加させ、早期に地元企業を知 るとともに、地域理解と地元就職の推進を図る。	・就職78名、進学55名(四大4人、短大15名、専門学校36名) の進路希望であった。就職希望者、進学希望者とも、年内に 進路が決定した。 ・学校推薦型選抜で学科試験や小論文が課されるケースが増 えたため、個別指導で対応した。また、外部講師による小論 文と志望理由書の指導を実施し、職員に対しては国語科によ る研修会を行った。 ・進路講演会、進路学習会、進路説明会、進路LHR等を実施す ることができた。また倉吉商工会議所、倉吉市役所と連携し て1年生対象の倉吉市企業説明会を実施した。 ・3年生就職希望者と進路部就職担当との面談を4月に実 施した。進学希望者についても進路部進学担当者との面談 を実施し、その後の進路指導に活かすことができた。 ・求人票、資格の手引のデータ化を行い、クロムブックで閲 覧できるようにした。	A	・個人面接を積極的に行いながら早 期に進路意識が高められるよう指導 を徹底する。 ・3年生に対してより確実な進路指 導を行うために、就職希望者と進学 希望者それぞれに進路部担当との面 談を計画する。 ・1年生から進学希望者補習を実施 して、大学、短大等を希望している 進学希望者の学力向上を図る。 ・求人票の検索等がより容易になる ようなシステムの導入を検討する。

	勤労観・職業観の育成(資格・検定の取得やインターンシップ)【進路部】【教務部】	・インターンシップは、コロナ禍以前どおりに実施できるようになった。 ・各科で目標としている資格・検定試験に積極的に挑戦している。		・進路意識の向上とインターンシップ・デュアルシステムによって、勤労観・職業観が育まれている。 ・多くの生徒が資格取得に向けて、意欲的に挑戦している。	・インターンシップ・ビジネス実習が充実したのになるよう、丁寧な事前・事後指導をする。 ・各科で試験の情報提供を行い、チャレンジを促すとともに、計画的な準備を実施する。	・インターンシップを予定通り実施し、生徒の職業観や勤労観を養うことができた。 ・各科で試験の情報提供や挑戦することを促す機会を増やしたが、受検者が減少したところもあった。資格取得に向けて計画的な補習を行った。	B	・生徒の進路希望を考慮した実習先になるよう心掛ける。 ・引き続き、生徒に対して資格取得に向けて意欲的に挑戦するよう促すとともに、試験の情報提供を行っていく。
	進路に対応できる学力の定着【教務部】	・昨年度のアンケートで、本校での授業が進路実現に役立っていると8割の生徒を感じる一方で、6割の生徒が家庭学習の時間が30分未満である。 ・授業がなるべく課題とならないよう、可能な限り授業変更で対応する。 ・学校設定科目を設置し、生徒の実態や進路希望に対応している。		・学習習慣が定着し、基礎学力の向上が図られている。 ・課題の授業が減り、授業時間が確保されている。 ・生徒の進路希望に応じた科目選択となっている。	・1・2学年が学習支援サービス「Classi」を利用し、自主学習の定着と基礎学力の定着を図る。 ・事前に教員が不在の情報を共有し、授業の入れ替えや売り買いを積極的に行って課題の授業を減らす。 ・次学年の選択科目の説明を丁寧に言い、学年・教科と連携をとりながら、生徒の進路希望とマッチした履修となるよう促す。	・「Classi」の活用について、効果が上がるような活用が十分でない。 ・生徒の平日の学習時間は、30分未満および0分の割合が昨年度よりも7.2%減少した。 ・2回行った基礎力診断テストにおいて、D3の人数は、後期が1名多い。 ・継続して授業の自習が増えないよう努めた。 ・選択科目について、生徒の進路希望にあった履修となるように、担任と生徒・保護者等と連携を図ることができた。	B	・学習支援サービス「Classi」を継続的に活用し、効果的な活用方法を見つけていく。 ・授業時間の確保に向けて、引き続き授業の入れ替え・売り買いに努めていく。 ・選択科目について、引き続き担任・生徒・保護者等と連携を図っていく。
	思考力・判断力の向上【教務部】	・生徒は落ち着いて生活しているが、主体的に授業に取り組んだり、自ら考えて自発的に行動できる生徒が少ない。		・思考力・判断力を育成するため、課題探究的な学習や、対話的な学習活動が実践されている。 ・達成感や自己肯定感を持った生徒が多くいる。	・各教科で授業公開を行ったり、職員が参加する授業研究会を行い、課題探究的な学習や、対話的な学習活動を授業に取り入れる授業を増やす。 ・校内・校外を問わず、学校行事や科の取り組みを通じて、生徒が活躍できる機会を増やす。	・10月に2回目の授業研究会を実施し、ICTを活用した授業展開や生徒への問いかけ方などで新たな気づきがあり、今後の授業に活かせる学びの機会となった。また、校内の研究授業や授業実践の回数は前年度より増えた。 ・継続して各分掌と連携しながら生徒の活躍の場を設けている。	B	・生徒がICTを活用して学んでいく授業づくりに継続的に取り組んでいく。 ・生徒が活躍できる機会を継続的に確保していく。
3 地域に愛され、信頼される学校づくり	地域とともにある学校づくり(学校運営協議会)【管理職】	学校運営協議会では今後の学校の在り方に資する意見や助言が得られた。		学校運営協議会の委員から積極的な意見・助言や感想があり、地域に開かれた活気のある学校になっている。	学校運営協議会の更なる活性化と地域と協働した活動を計画する。会議だけではなく、委員が参加できる取り組みを作る。	・委員には学校行事を見学していただき、会においても積極的な意見・助言や感想があった。 ・委員が地域学校協働活動推進員となり、地域活動サポーター発足のコーディネートをし、県外生徒見守り隊として3名を任命して運用を始めた。	A	・引き続き、会が更に活性化し、地域と協働した活動が展開できるよう議論を進める。 ・県外生徒を地域で支え、より地域に関われるよう活動を続ける。
	地域への情報発信(積極的な広報活動)【総務部】	・ホームページ更新が行われ、学校行事、各科の学習活動、部活動の大会状況が配信されている。		・学校紹介や学校行事について、ホームページの更新が頻繁に行われている。 ・報道機関へ適宜情報を提供し、報道されることが増加した。	・学校行事について、積極的に総務部から各担当者にホームページやSNSへの掲載を依頼する。また、報道機関にも適宜情報を提供する。 ・ホームページやSNSがさらに充実するように、更新頻度の少ない学習活動・部活動に依頼する。	・今年度～1/8までの学校HP閲覧者数83,327名(昨年度同時期 63,709名)記事アップ数147件(同155件)。学校生活アンケート(保護者用)における「積極的に学校の情報提供に努めている」否定的回答割合9.5%(同6.8%)HP閲覧者数は増加しているが、積極的に情報提供していると感じていない保護者が一定数いる。	B	・学校HPの記事のアップだけではなく、SNSへの記事投稿を積極的に行う。
	地域・産業界との交流【各学科】	M	自動車整備振興会と連携した自動車整備体験学習や上北条公民館との交流を継続中である。	ホームページやチラシ等あらゆる手段を活用しながら、科みずから積極的に働きかけ、地域・産業界との連携・交流のきっかけを作っていく。	課題研究の中で、障がい者スポーツ普及に向けた器具の製作や小中学校への出前授業等、地域企業や他校種との関りを通して、生徒の協調性やコミュニケーション能力を高めていく。	・地域・産業界との繋がりを求め、待ちの姿勢ではなくこちらから積極的に動くことができた。地域の小学生が来校し、専門科の体験活動も実施した。	A	・継続して連携を深めながら取り組んでいく。
		E	・鳥取県電気工業組合との共同作業で、倉吉交流プラザにイルミネーションを取り付け、片付け回収を行い、地域に貢献した。 ・「電気の技術を活かした福祉活動」について、地区民生委員の方や社会福祉協議会、鳥取県電業協会中部支部と連携しながら、地域に貢献した。	・地元産業界との共同作業や意見交換を通して、交流が図られている。 ・地域の家庭に出向き、奉仕活動することで地域の方との交流を図る。 ・社会福祉協議会主催のボランティアフェスティバルに参加し、地域の方との交流を図る。	・イルミネーション設置について、アイデアの提案等を行う。 ・「電気の技術を生かした福祉活動」の活動前後で民生委員、電業協会、社会福祉協議会、教職員・生徒との意見交換を行い連携をとる。 ・ボランティアフェスティバルでテクニカルボランティアのおもちゃの病院を開催する。	・鳥取県電気工業工業組合中部支部と連携し、イルミネーションの設置・点灯式・撤去を無事完了することができた。 ・「電気の技術を生かした福祉活動」について、倉吉市社会福祉協議会と連携し、訪問先の要望も事前に伺い準備して実行することができた。 ・課題研究をとおしてボランティアフェスティバルに参加し、おもちゃの病院を開催することができた。地域の方々との交流が図られた。	A	・来年度も鳥取県電気工業工業組合中部支部及び倉吉市社会福祉協議会担当者との連携をし、活動を継続していきたい。 ・イルミネーションの取り組みを課題研究と関連付け、よりよい活動にしていきたい。また、他科との連携も模索したい。
		G	・課題研究「くらそうや」「くらそうサロン」、就業体験学習「ビジネス実習」「インターンシップ」ともに地域の方々、企業の理解を得られ、交流・連携が図られている。	・課題研究「くらそうや」「くらそうサロン」、就業体験学習「ビジネス実習」「インターンシップ」を通して、地域の方々との交流や事業所との連携から、地域産業の理解が深められ郷土愛が育まれている。	・課題研究「くらそうや」「くらそうサロン」、就業体験学習「ビジネス実習」「インターンシップ」の機会を通して、地域の方々と関わろうとする態度を育成していく。	・「くらそうや」は4年ぶりに地域イベントに参加し、県内外の多くの方々と交流する機会を得た。 ・12月就業体験学習では、感染症流行により十分に実習できなかった生徒が多かったが、事業所の方々に熱心に厳しく指導いただき、生徒の就業意識や態度が育成された。	A	・来年度は「ビジネスセミナー」講座に、倉吉市や商工会議所など、地域連携を充実させる内容を取り入れてみることを検討中。
		D	・昨年度は交流事業、社会人講師による講習会、企業見学など、コロナ禍以前と同様に実施できた。インフルエンザなどにより実習が急遽中止となることがあった。 ・課題研究(食分野)では、地元企業とのコラボ商品の開発・販売を実施した。 ・ボランティア活動の参加者は微増であった。	・認定こども園や高齢者福祉施設での交流や実習、企業見学を実施し、職業観やコミュニケーション技術の育成をする。 ・課題研究(食分野)において、地元企業と連携した商品開発を行う。 ・ボランティア活動の参加者を増やす。	・交流活動や実習では、職業人としての視点を理解して取り組めるように、指導を行う。また、実施時期を早めに設定し、何かあっても中止ではなく延期して実施できるようにする。 ・実習や交流活動に協力してもらえる地元企業を開拓する。 ・ボランティア活動の意義を伝え、アナウンスを積極的に行う。	・生活福祉コースの高齢者との交流が2年生1回・3年生4回、3年生生活福祉コース保育園交流1回、課題研究保育分野による認定こども園交流6回、各学年社会人講師による講習会13回、企業見学1回など、多くの施設・企業等から協力を受け、職業観の育成や専門的知識習得の機会を得ることができた。 ・ボランティアの参加者数は増加した。昨年度コロナの影響が緩和し参加した生徒が引き続き申し込んでいた。 ・課題研究(食分野)で地域食材を使用した商品を開発、販売。中部ハイスクールフォーラムや鳥取県教育研究大会で発表し、地域とのつながりを深めた。	A	・交流や社会人講師による講習会は、来年度も同様の内容で企画していく。 ・社会人講師や実習の受け入れ先など、新規開拓もしていく。 ・ボランティア参加については関連授業で積極的にアナウンスしていく。

4 専門教育の推進	専門分野の基本的知識・技術を持ち、チャレンジ精神に富んだ人材の育成 【各学科】	M	授業や実習を通して、検定や資格について話す機会を教員側が作るように心掛けている。	・ジュニアマイスター取得10名以上 ・卒業までに、機械科生徒全員が技能検定を一つ以上取得する。 ・合格率を高められるような指導体制を確立する。	・資格取得に向けた社会人講師の活用の継続。 ・企業に習い、有資格者一覧表を実習棟に掲示し、生徒の資格取得への意欲を促進する。 ・実習棟入口の掲示板を利用し、資格に関する案内を充実させる。	・社会人講師の活用は昨年並みに実施することができた。掲示板の活用についても、少しずつ進んでいる。 ・ジュニアマイスター取得については5名。	B	・1～3年生全てに資格案内用のクラスルームを作成し、生徒へ確実に案内が周知できるような取り組みを検討したい
		E	・学校独自事業において、鳥取県電業協会中部支部に電気工事、電気製図の指導を受け、生徒の知識・技術の向上を図ることができた。 ・鳥取県電業協会中部支部から高校生ものづくりコンテストに向けての技術指導を受けることができなかったが、5名の生徒がものづくり県大会に出場し、2名の生徒が中国大会出場権を獲得した。	・生徒の電気工事、電気製図などの知識・技術が向上している。 ・高校生ものづくりコンテスト中国大会に出場し、入賞している。	・鳥取県電業協会中部支部などの外部の専門家の方々の指導を受ける機会を作り、生徒の知識・技能の向上を図る。	・鳥取県電業協会中部支部に電気工事および電気製図の指導をしていただき、生徒は知識・技術を向上することができた。 ・令和6年度高校生ものづくりコンテスト電気工事部門中国大会に出場することができた。 ・令和6年度高校生ものづくりコンテスト電気工事部門県大会に4名が出場し、来年度の中国大会への出場権を得ることができた。	A	・来年度も鳥取県電業協会中部支部との連携を深め、活動を継続していきたい。 ・今年度は鳥取県電業協会中部支部の技術指導を受けることが出来なかったが、来年度は状況をみて技術指導を受けることも検討する。
		C	・クラス内で生徒間に学力差があり、一斉授業での指導に工夫を要する。	・資格取得に向けて計画的に努力し、チャレンジ精神を養っている。 ・全商各種検定試験において1級3種目合格を達成した生徒が20人以上いる。	・可能な限り、習熟度別や少人数の授業展開に取り組む。 ・長期休業中や放課後に課外授業を実施し、上位級取得目標の生徒や学力不振生徒に対応していく。	・長期休業中に課外学習、検定前の放課後に対策補習を実施した。 ・全商各種検定試験において1級3種目合格を達成した生徒は8人。 ・簿記検定において、3級（奨励級）の不合格者が数人出た。 ・高度な資格取得に挑戦した生徒1名、現在勉強中の生徒が5人いる。	B	・上位級の取得や、再チャレンジ生徒に対して声掛けや、学力不振生徒の個別対応を強化していく。 ・生徒間の著しい学力差に対応するために、ITの授業展開を強く要望する。
	学科の枠を超えた取組の実践 (総合選択制) 【各学科】	D	・授業においては、生徒はおおむねまじめに取り組んでいる。しかし、年々技術の習得・定着に時間がかかるようになっていと感じる。 ・個人差はあるが全体的にチャレンジ精神旺盛とは言えない。	・家庭科技術検定に挑戦し、知識と技術の定着とともにチャレンジ精神を育成する。	・各種検定、コンテスト、ボランティア活動への参加を促す。	・家庭科技術検定2級以上の申込延べ人数は昨年度より20人増加。上位級挑戦に意欲的であった。 ・課題研究保育分野で県外の大学が主催する絵本コンクールに応募。最優秀賞・入選にそれぞれ1名が選ばれた。 ・ボランティアに意欲的に参加する生徒が増え、ヘルプメイト認定者が久しぶりに3名出た。	A	・家庭科技術検定は技術の定着や生徒自身の技能習得の証明となることを授業の中で積極的に伝えていき、来年度も意欲的に取り組む姿勢を育みたい。 ・コンテスト参加を引き続き検討していく。 ・ボランティア参加は関連授業で積極的にアナウンスしていく。
		M	昨年度は、他科からの依頼に対し、課題研究の中で要望に応じて協力した。	・コンテストへの応募やボランティア活動など、外部の活動に参加する。	・それぞれの専門性を理解し、連携を図りながら取り組みを進めていく。 ・他科と共同して、様々な視点で課題研究に取り組んでいく。	課題研究の中で、電気科と連携して風力発電やセグウェイ、スロープ製作など年間を通じて取り組むことができた。またビジネス科との連携で、焼き印製作をしたり生活デザイン科に来年度から使用するアームカバーを作っていたいただいた。	A	連携を通して、科を超えた学び合いに繋がるように取り組んでいきたい。
		E	・「くらそうや」において「おもちゃの病院」を開き、おもちゃの修理を行うことができた。 ・「くらそうや」への「商品提供」を行うことができた。	・「くらそうや」に電気科として「おもちゃの病院」及び「商品提供」ができています。	・課題研究「テクニカルボランティア」をとおして「おもちゃの病院」を行う。 ・電気工学部と連携して「商品提供」を行う。また、課題研究の中でもアイデアを出して、商品作成を行う。 ・課題研究において、機械科と共同してものづくりを行う。	・「くらそうや」との連携で「おもちゃの病院」を行い、8個のおもちゃを預かり、修理することができた。 ・電気工学部や課題研究の取り組みで、「くらそうや」で販売する商品「写真スタンド」を提供することができ、たくさんのお客様に購入していただいた。 ・課題研究において、機械科と共同してボランティアフェスティバルへの参加やセグウェイの作製、風力発電の研究に取り組むことができた。	A	・来年度も「おもちゃの病院」の実施に向けて、ビジネス科と連携をはかり、電気技術を活かした商品も製作し、「くらそうや」に提供していきたい。 ・来年度も引き続き、機械科と課題研究において連携して研究に取り組みたい。
		C	・課題研究「くらそうや」において、他科から販売商品を提供してもらっている。 ・総合選択制の他科選択「コミュニケーション演習」や「アプリケーション演習」で、ビジネスマナーや基礎的なワードやエクセル操作を習得している。	電気科と連携した課題研究への取り組みを通し、科の枠を超えた横断的な学習や、それぞれの専門性を活かした活動を行う。また、他科との連携を通し協調性や幅広くお互いの専門性を学びあう機会を増やす。	・課題研究「くらそうや」にて、消費者と積極的にコミュニケーションをとり、商品に関する感想や意見を丁寧に聴き取り、商品提供学科にフィードバックし製品作りに活かしてもらう。 ・総合選択制の他科選択「コミュニケーション演習」「アプリケーション演習」の魅力を伝え、履修を促す。	・機械科より商品開発の協力、電気科と生活デザイン科より「くらそうや」商品を提供していただいた。 ・他科選択「コミュニケーション演習」の選択者が増えた。(R5 7人→R6 16人) また、「アプリケーション演習」履修者は全員ワードやエクセルなどの検定取得に挑戦している。	A	・来年度の課題研究「くらそうや」において新しい他科連携の取組を考え、さらに充実させていく。
		D	ビジネス科と連携。「くらそうや」へ商品提供を行っている。	・課題研究において、他科と共同してものづくりが行えている。	・「くらそうや」への商品提供は、昨年度の売れ行きを振り返り、よりよい商品の企画を行う。 ・情報交換を行い、他学科との連携を検討する。	・「くらそうや」へ提供した商品は新企画が好評だった。 ・機械科から実習で使用するアームカバー製作の依頼を受け、課題研究の被服分野で10組製作した。	A	・来年度も引き続き、売れる商品を考案し、ビジネス科の販売に協力していく。 ・他科との連携も引き続き検討を続ける。
	5 業務改善の取組	長時間の時間外勤務者の解消 【管理職】	・R5年度における月平均時間外業務時間は、前年度を0.3時間(R4:18.2→R5:18.5)上回った。 ・学校評価アンケート(教職員)によると教職員の時間外勤務削減の意識はあるものの、実行に移していないことが多い。	・年間の時間外業務時間が360時間を超えない。 ・職場全体に業務を分担する土壌があり、チームで仕事をこなす意識が浸透している。 ・衛生委員会で職場の安全衛生管理について建設的な意見が交わされている。	・教科や分掌で他の職員の業務量に関心を持ち、職場で支えあえる環境作りを促進する。 ・各自の働きぶりを振り返り、時間外勤務時間を自己チェックしながら、計画的に業務を進めることで、時間外用業務の削減とともに、多忙感の解消を図る。 ・休日の出張申請時に週休日振替を取得させることを徹底する。	・多様化する勤務形態や働き方に対応できるよう、衛生委員会での具体的提案をもとに職場全体で支え合う体制を作っている。 ・時間外業務時間が年間360時間を超える職員は、昨年度と同程度である。 ・4～1月の、月ごとの一人あたりの時間外業務時間の平均は17.8時間で、R5年度より2.1時間減少した。個人のばらつきも減少している。 ・出張申請時に週休日振替を取得させている。	B	・分掌や教科等で、主任を中心に互いの気付きや積極的な助け合いがさらに活性化するよう、働きかける。 ・部活動では部活動指導員や外部指導者の導入を進めていく。 ・業務の見直しやICT化による業務効率の向上を目指す。

A [90%以上] B [89～70%] C [69～50%] D [49～30%] E [29%以下]